



Where
“REALITY”
Goes

清流の国ぎふ芸術祭

Art Award IN THE CUBE 2023

清流の国ぎふ芸術祭

Art Award IN THE CUBE 2023

目次
Contents

004 ごあいさつ
Foreword

006 開催概要
General Information

審査員・講評
Judges・Comments

009 入江 経一
IRIE Keiichi

010 岩崎 秀雄
IWASAKI Hideo

011 北村 明子
KITAMURA Akiko

012 四方 幸子
SHIKATA Yukiko

013 寺内 曜子
TERAUCHI Yoko

014 森村 泰昌
MORIMURA Yasumasa

015 山極 壽一
YAMAGIWA Juichi

第1章 図版
Chapter1 - Catalogue

019 INAGAKI MOMO
イナガキ モモ

023 大西 康明
ONISHI Yasuaki

027 岡 ともみ
OKA Tomomi

031 奥中 章人
OKUNAKA Akihito

035 北川 純
KITAGAWA Jun

039 GengoRaw(石橋 友也+新倉 健人)
GengoRaw (ISHIBASHI Tomoya+NIIKURA Kento)

043 小孫 哲太郎
KOMAGO Tetsutaro

047 柴田 美智子
SHIBATA Michiko

051 身体企画ユニット ヨハク
YOHAKU

055 千田 泰広
CHIDA Yasuhiro

059 千葉 麻十佳
CHIBA Madoka

063 古屋 崇久
FURUYA Takahisa

067 florian gadenne + miki okubo
フロリアン・ガデン+ミキ・オオクボ

071 山本 雄教
YAMAMOTO Yukyo

第2章 記録
Chapter2 - Document

076 募集から審査までの記録

080 関連プログラム[プレイベント]

082 AAICの特徴

084 展覧会概要

085 表彰式／開場式(テープカット)

086 会場風景

087 学校団体鑑賞

088 関連プログラム[会期中イベント]

090 関連プログラム[会期中ワークショップ]

第3章 資料
Chapter3 - Data

094 スケジュール

095 広報

100 来場者アンケート

102 会場風景

104 運営体制

106 企画委員長 総評
Project supervisor's Comment

「清流の国ぎふ芸術祭Art Award IN THE CUBE」は、69回の歴史を刻んだ岐阜県美術展を刷新し、想像力溢れる新たな才能の発掘と育成を目的として創設した、3年に1度開催する全国規模の企画公募展です。

3回目となる今回は、海外31作品を含む574作品の応募をいただき、その中から14作品が展示され、4月22日から6月18日の50日間で61,763人もの方々にご鑑賞いただきました。会期中には、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが第5類に移行され、今回の公募テーマ“「リアル」のゆくえ”のとおり、日常の中に少しずつ「リアル」が戻ってくる、まさにその過渡期に展覧会を開催することとなりました。

また、新たな鑑賞スタイルとして、ウェブ上から展覧会場をリモートで体験できる「バーチャル鑑賞」を公開し、作品を前にして感じるリアルの良さ、時間や場所を選ばず誰もが気軽に芸術作品に親しめるデジタルの良さ、双方の良さに触れていただけたと思います。

本展覧会の開催にあたり、ご支援ご協力を賜りましたすべての皆様に、深く感謝申し上げます。また、今回入選されました作家の皆様が、このAAICを契機として、全国そして世界へ羽ばたいていかれることを祈念するとともに、本展覧会が岐阜県の文化芸術のさらなる発展に寄与することを心から願っております。

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会 名誉会長
岐阜県知事 古田 肇

「清流の国ぎふ芸術祭Art Award IN THE CUBE」は、3回目を迎える今回も様々な分野で活躍されている7人の審査員に選ばれた才能あふれるアーティストの多彩な作品が選ばれ、4月22日、大きく注目される中、幕を開けました。会期後半からは、来場者数が爆発的に伸び、開館前には入場待ちの列や各キューブ作品にも長蛇の列が発生するなど、非常に多くの方々にご来場いただきました。

特に、SNSによる「非常に面白いイベントである」との情報が広がり若い世代や子連れファミリーなど、あまり美術館に足を運ばないような層にも多数お越しいただいたほか、県内小・中・高・特別支援学校の児童・生徒を対象とした「学校団体鑑賞」を実施し、間近に作品に触れる鑑賞機会を提供することができました。また、関連プログラムの一環として、入選作家によるワークショップや、審査員によるクロストークを開催し、多くの方々に「現代アート」を身近に感じていただきましたことも大変嬉しく思います。

かくも、盛大に開催できましたこと、協賛・助成いただいた皆様、審査員、企画委員並びにボランティア、制作アドバイザーなど本展覧会の開催にあたりご協力いただいた関係各位に、心より感謝申し上げます。

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会
会長 土屋 明之

Foreword

Gifu Land of Clear Waters Art Festival - Art Award IN THE CUBE (AAIC) is a nationwide exhibition held every three years as an open art competition, with a view to discovering and fostering new creative talent while building on the tradition of its predecessor, the Gifu Prefecture Art Exhibition, which had been held 69 times in the past.

Held for the third time, AAIC 2023 received 574 entries including 31 from overseas. Of these, 14 entries were selected for the exhibition, which ran for 50 days from April 22 to June 18, 2023 and attracted 61,763 visitors. During the exhibition period, the status of Covid-19 was downgraded to Class 5 under Japan’s infectious disease control law. As a result, the exhibition coincided with a period when REALITY was slowly returning to everyday life, which increased the timeliness and relevance of the theme of AAIC 2023, “Where ‘REALITY’ Goes.”

The exhibition was also held in a virtual format, allowing people to enjoy art in a new style through a website. In doing so, we combined the advantage of actually experiencing and seeing works of art with one’s own eyes, with that of a digital setting that allowed anyone to enjoy art easily, at any time and anywhere.

I would like to express my heartfelt gratitude to all people who assisted the exhibition. Lastly, I sincerely hope that AAIC will help the artists selected for the exhibition to achieve greater success both nationwide and internationally and that this exhibition will help enhance the presence of Gifu Prefecture as a cultural and artistic center.

Honorary Chairperson of the Executive Committee of Gifu Land of Clear Waters Art Festival
Art Award IN THE CUBE

Governor of Gifu Prefecture Furuta Hajime

The exhibition of the third Gifu Land of Clear Waters Art Festival - Art Award IN THE CUBE (AAIC) opened on April 22, 2023, featuring a diverse range of works by talented artists, selected by a panel of seven distinguished judges from different fields. While the exhibition attracted intense public interest from the start, the number of visitors increased greatly during the latter half, with long queues forming even before the opening time of the exhibition and in front of the exhibits placed in cubes.

It is particularly noteworthy that comments spread quickly via social media that the exhibition was “very interesting,” which attracted many people, including those with few opportunities to visit art exhibitions such as young people and families with small children. We also ran a group visit program for students of elementary schools, junior high schools, high schools and special support schools in Gifu Prefecture to give them the chance to see the outstanding works of art firsthand, while organizing workshops inviting artists whose works were selected for the exhibition and a related talk session among the judges. We are thrilled that the exhibition brought many people closer to contemporary art.

I would like to offer my deep gratitude to all people who contributed to the success of the exhibition as sponsors, supporters, judges, planning committee members, volunteers, production advisors or in other roles.

Chairperson of the Executive Committee of Gifu Land of Clear Waters Art Festival
Art Award IN THE CUBE

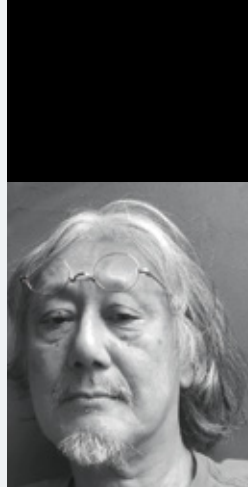
Tsuchiya Akiyuki

開催概要

名称	清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2023
目的	・新たな才能の発掘と育成 ・アートに関わる人材の育成とネットワークづくり ・新たな形のアートの鑑賞機会を提供
テーマ	「リアル」のゆくえ
作品条件	4.8m(幅)×4.8m(奥行)×3.6m(高さ)のキューブ空間で展示できること。
会期	2023年4月22日(土)から6月18日(日)まで(開館日:50日間)
会場	岐阜県美術館(岐阜県岐阜市宇佐4-1-22)
展示数	14作品
審査員	入江 経一 建築家／デザインディレクター 岩崎 秀雄 アーティスト・研究者／早稲田大学理工学術院教授、metaPhorest代表 北村 明子 ダンサー・振付家／信州大学人文学部教授 四方 幸子 キュレーター・批評家／美術評論家連盟会長 寺内 曜子 美術家 森村 泰昌 美術家 山極 壽一 総合地球環境学研究所所長
主催	清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会 岐阜県

General Information

Name	Gifu Land of Clear Waters Art Festival - Art Award IN THE CUBE 2023	
Purpose	- To discover and nurture new talent. - To train people related to art and to create a network. - To offer opportunities for appreciation of new forms of art.	
Theme	Where “REALITY” Goes	
Conditions	Submitted works must be displayable in a cuboid space measuring 4.8m (w) x 4.8m(d) x 3.6m (h).	
Exhibition period	April 22 (Sat.) – June 18 (Sun.) 2023: Open for 50 days	
Venue	The Museum of Fine Arts, Gifu (4-1-22 Usa, Gifu City Gifu Prefecture)	
Number of exhibits	14 Works	
Judges	IRIE Keiichi Architect/Design Director IWASAKI Hideo Artist and Researcher/Professor, Faculty of Science and Engineering, Waseda University, Director of metaPhorest KITAMURA Akiko Dancer and Choreographer/ Professor, Faculty of Arts, Shinshu University SHIKATA Yukiko Curator and Critic/ President, International Association of Art Critics, Japanese Section TERAUCHI Yoko Artist MORIMURA Yasumasa Artist YAMAGIWA Juichi Director-General, Research Institute for Humanity and Nature	
Hosts	Executive Committe of Gifu Land of Clear Waters Art Festival Art Award IN THE CUBE Gifu Prefecture	



入江 経一

建築家／デザインディレクター

IRIE Keiichi

Architect/Design Director

一次審査講評

現在の世界に対して、「リアルなゆくえ」という問いかけに対する
答えはあるのだろうか。

真実らしさを求めた遠近法から始まって、100年前には芸術という枠組みも壊され、今や情報は実体より大きい。そんな現在の世界に対して、「リアルなゆくえ」という問いかけに対する答えはあるのだろうか。その対象は身体でも環境でも情報でもいいが、燃えるような「リアル」と書き込まれた字があるのなら、答えなどいらないのかもしれない。私は次のような選考のガイドラインを決めた。

- ①今の時代の状況を映し出すもの
- ②新たな価値観を予見させるもの
- ③社会や人々へのフィードバックがあるもの

いまだ語られていない言葉や言動を見せるような作品が見たいと、574点の作品に向かい合ったが、選ぶのはとても難しかった。アートの概念は強固なものだと実感する。逸脱や価値の定まらないものは審査で得票することも難しいが、ともかくも力作が選ばれた。実制作を通してさらに芳醇な作品となっていくのが楽しみである。

二次審査講評

一体自分はどこにいるのか。
今ここにいる自分を自分だと思っているのは幻想に過ぎないのか。

「触れるもの、絶対に触れないもの」
何組かの猿たちが梯子の上下で互に見つめあっている。互いにそっくりだが片方の猿は片手がなかったり、のど首を欠いていたりして少しだけ完全とは言えない。猿の顔や胴体の一部は鉛のような表面で覆われていて、実は猿ではないことを暗示している。そう、一目見ればわかるように、このユーモラスな猿たちは今やたくさんの自己に分裂した「私」へのアイロニーなのだ。

一体自分はどこにいるのか。今ここにいる自分を自分だと思っているのは幻想に過ぎないのか。作者は分裂し複製された自己をアバターと呼んでいるが、いまやそれは一つどころか多くの自分となって現実空間にもネット空間にも拡散されてしまった。そんな私という存在に生じている事態を、この作品は諧謔をこめて突きつけているようだ。君が思っている自分(リアル)なんて不完全なものさ。猿は手ごわい。

審査員・講評

Judges・Comments

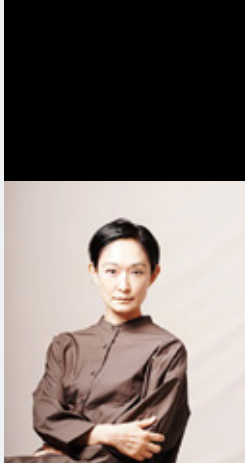


Photo by Hiroyasu Daido

北村 明子

ダンサー・振付家／信州大学人文学部教授

KITAMURA Akiko

Dancer and Choreographer/
Professor, Faculty of Arts, Shinshu University

一次審査講評

アイデアは、“リアルなゆくえ”の可能性を無限に提示しながら時空を漂っているようだった。

多くの制限と緊迫が続いた2年と少しの後、踊ることの“リアルなゆくえ”を考えることが当たり前になった身体で臨んだ一次審査。企画書、マケット、映像を行ったり来たりしながら、直感と思考の網の目が重なり合うような瞬間、脳内でイメージするキューブの中で、まだ存在しない作品と、ダイレクトに繋がるような時間を過ごした。身体感覚や自明の秩序が、ずれていったり、歪んだり、ひっくり返されたりするアイデアは、“リアルなゆくえ”の可能性を無限に提示しながら時空を漂っているようだった。巡る思考が身体感覚へと表出し、それがまた思考へと戻されるといった循環運動を起こしているような、それは、ダンスと同じ現象のようにも思われた。直感を伴う体験で、身体感覚が変化する、思考、時空間、物質との接続。この体験はダンスの新たな感覚を切り開くことにもなるだろう。そして、実際の作品の存在は、それをどのように強化、または想像を超えたものへと飛躍してくれるのか、来年の4月への期待が大きく膨らむ。

二次審査講評

CUBE・・・制限とも自由とも捉えることのできるお題目に、全く異なるアプローチを持つ作品群は、一つや二つのテーマ性では収まらない多様性に満ちていた。

CUBE・・・制限とも自由とも捉えることのできるお題目に、全く異なるアプローチを持つ作品群は、一つや二つのテーマ性では収まらない多様性に満ちていた。実作品の体験は、困ったことにほとんど全てが楽しく、“Award”であることを忘れかけた程。視覚性、物質性から時空を広げて思考を巡らせ、五感からイメージーションの解放・飛躍を誘発し、ストイックな強度やセンスの良さは、より深い解釈の旅を促進する。これらの魔力は作家・作品と鑑賞者の間に生じるものであり、漂う幽霊を追いかける行為のように、確信を失いそうになる波もやってくる。自問自答を繰り返し、“ブレない判断基準”の探求という、喜ばしくも苦しい試練の中で、時間経過とともに掴めてくるものがあった。それは、作家がテーマと真剣に向きあった証跡が、鑑賞・体験者に浸透し、ここから出発する“リアルなゆくえ”とは、いかなるものとして共有され、それが何と、どのように、どこまで繋がりが得るものか、と、粘り強くも軽やかに、問いかけ続けてくる、完結し得ない対話の力だった。



岩崎 秀雄

アーティスト・研究者／早稲田大学理工学術院教授、metaPhorest代表

IWASAKI Hideo

Artist and Researcher/
Professor, Faculty of Science and Engineering, Waseda University,
Director of metaPhorest

一次審査講評

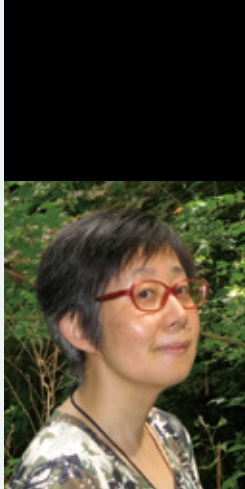
キューブに実装される作品は、すべてリアルであり、リアルではない両義性として私たちの前に立ちはだかる。

様々なアイデアをキューブの形に実装する意欲的な企画が寄せられた。まずは応募してくださった作家の方々に心からお礼申し上げたい。私には様々な作品の可能性に出会える点で有難いことだったが、570あまりの作品からごく少数を選ぶのは、多くの作品を選外にせざるを得ないという点で苦渋に満ちた作業だった。私としては50点くらい残したいものがあった。全応募企画に対してそれぞれ短い覚書をしたためた上で臨んだ選考会議では、選考委員各自が真剣に臨んだが、投票が主体で、残念ながら十分な検討と熟議を経て入選作を決めたとは言い難い面があった。このため、一部の作品はその真価に気付くことのできないままに落選してしまったものがあると思う。これについては十分反省しつつ、今後の審査に心して臨みたい。また、野外展示や生物を含む展示など、意欲作ながら公募要領の規定を満たしていない点で採用できない作品が少なからずあったことは勿体なかった。とはいえ、選ばれた作品はどれも興味深く、どのように実装されるか早く見てみたいと思わせられるものばかりだ。キューブに実装される作品は、すべてリアルであり、リアルではない両義性として私たちの前に立ちはだかる。その一般的な前提を飛び越えて、刺さってくる体験を共有できる作品に出会えることを心待ちにしている。

二次審査講評

多様なアプローチと成果を前に、どこに力点を置いて評価するのか、テーマとの整合性をどの程度重視するのかなど多くの課題があり、紛糾とまではいかないまでも、様々な議論があった。

大変な力作揃いで、まずは作者の方々、裏で奔走してくださった方々に心からお礼申し上げます。審査では、多様なアプローチと成果を前に、どこに力点を置いて評価するのか、テーマとの整合性をどの程度重視するのかなど多くの課題があり、紛糾とまではいかないまでも、様々な議論がありました。大賞作品の選出にあっても意見が相当割れました。河原の石を、集光された太陽光の熱で溶かし、地の下のマグマを想起させるプロジェクトについて、私は「今ココと壮大な地球史的時空間を詩的に切り結ぶ貴重な試み」と評価しました。審査員賞に選ばせていただいた「橋」を巡る作品も、橋の狭義の機能から拡張し、抽象的なレベルまで含んで何かを繋ぎ、今ココと外部の関係性を開いていくポテンシャルの魅力と、地域に根差した地道なリサーチに惹かれました。ただ、どちらの作品も、本来持ちうる広がりや強度を十分に表現しきれていないのではないかと、僭越ながら感じてしまう部分もあり（私が見落としているだけかもしれませんが）、今後の発展・展開にも期待したいという意味で、推させていただきます。他にも「サカサゴト」、「One room」といった作品にも、大いに惹かれるところがありました。鑑賞者の方々は、受賞作かどうかに関をとられず、ぜひそれぞれの作品に触れて、心行くまで体感していただきたいと思います。



寺内 曜子

美術家

TERAUCHI Yoko

Artist

一次審査講評

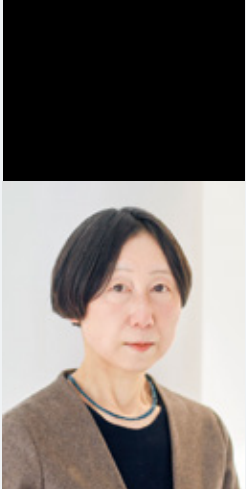
キューブを美術館展示室内に入れ子として展示するという二重構造は
実は展示空間としては、とても難しい。

この公募展が他の公募展とは異なる1番の特徴は自立した大きなキューブという物体の存在だと私は思う。幅4.8×奥行き4.8×高さ3.6メートルの木製のキューブを自由に使えるという機会はなかなか得ることはできない。なので、自立したキューブ自体の存在を意識した作品企画かどうかを選考の基準とし、私個人の選択を行った。応募企画の多くは、キューブの内部空間に作品を「収める」ことを基本としたものに私には見えたと、規定の空間内に物や状況を収めるだけならば、何も自立したキューブがなくとも、美術館の室内で旧来通りの展示で済むのでは、と思われる。AAICの条件である、内部空間を持ったキューブを美術館展示室内に入れ子として展示するという二重構造は実は展示空間としては、とても難しいと私は思う。最終選考には残らなかったが、そのあたりを意識した企画も少数ながらあり、各々が独自の切り口で「キューブの実在」と取り組んでいて、興味深かった。一度ここまで応募条件を狭めても面白いのではと思った。

二次審査講評

今回の審査を終えて、この大きな自立するキューブから
「必然的に生まれた」作品を見てみたい気持ちがより強くなった。

入選した14点は、個々の作品のアプローチや表現が違うので、ヴァリエティーの多さを楽しめる展覧会となっていると思う。その中から大賞を選ぶのはとても難しかった。審査員同士の正直な意見を交わして、丁寧に審査出来たのは良かったと思う。
私自身は各作家の「リアルゆくえ」の内容を云々するよりも、①各作家が自分の信じる「リアル」を、言葉の助け無しに見ただけで伝わる説得力ある作品として完成させたか、②キューブを内側空間だけでなく外側空間もどう使っているか、を判断基準とした。
この基準②から外れた作品の中にも、完成度の高い作品は何点かある。キューブの制約を外すとより良くなっただろうと思われる作品もある。テーマを重視するかキューブを重視するかも作家及び審査員の意見の分かれるところだ。
私は今回の審査を終えて、この大きな自立するキューブから「必然的に生まれた」作品を見てみたい気持ちがより強くなった。



四方 幸子

キュレーター・批評家／美術評論家連盟会長

SHIKATA Yukiko

Curator and Critic/
President, International Association of Art Critics, Japanese Section

一次審査講評

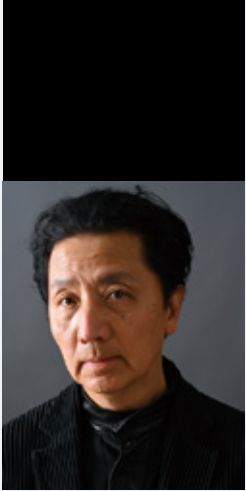
「リアル」へのアプローチは様々だが、いずれも人や社会、自然とのつながりを
再接続しようとする意思が感じられた。

「キューブ」への挑戦に加え、応募段階から新型コロナウイルス感染症の只中となった今回、そのような時代を反映した「リアル」とそのゆくえが、多くの企画から感じられた。応募者名も住所も性別も知らされない本公募ならではの審査は、内容から応募者を想像し始める興味深い体験でもあった。応募は、現代美術を中心に建築やメディアアートも多く、絵画、彫刻、工芸など美術全般に加え、このような枠組みでは困難に思えるパフォーマンスも目立った。内容には、清流や石、美濃和紙や美濃焼など、岐阜の豊かな自然や文化に関わるものも多く見られた。最も印象的だったのは、ポストパンデミックそして直面する国内外の諸問題を受け止めようとする切実さである。「リアル」へのアプローチは、知覚認識や身体性を扱うもの、過去を振り返ったり、人間中心主義を相対化するなど様々だが、いずれも人や社会、自然とのつながりを再接続しようとする意思が感じられた。とりわけ日常から記憶や死など視えにくいものに寄り添ったり、自然環境や生態系にミクロ、マクロな眼差しで関係を持つとうとする企画を評価した。加えて、ユーモアやシュールさによって混迷を突き抜けようとする企画も評価した。

二次審査講評

審査では、キューブや今回のテーマへのアプローチ、ビジョンの実現性を重視したが、
何よりも作品が放つ力やメッセージを受け止めた。

各作品のレベルは高く、しかも多様で、全体で見応えのある展覧会となっていた。審査では、キューブや今回のテーマへのアプローチ、ビジョンの実現性を重視したが、何よりも作品が放つ力やメッセージを受け止めた。各審査員の観点は示唆に富み、活発な議論が交わされた中、大賞については意見が分かれた。その結果選ばれた千葉麻十佳作品は、川で拾った石を太陽熱で溶かし「マグマに戻す」もので、溶ける石の映像や音の生々しさとともに岐阜から地球史や地球深部へと至る、ささやかながら鮮烈で壮大なまなざしによる。石から地球の連綿とした営みへ「リアル」を接続することで、想像力を喚起するとともに人間の立ち位置を問いかける側面を評価した。
審査員賞の北川純作品は、キューブを即物的に「箱」と見立て、コロナ禍の生活をモノの側から提示した。来場者が搬送物になる体験を提供することで、私たちはショッピングをしているようで実はさせられているのでは、と思わせるドライなユーモアが効いていた。



森村 泰昌

美術家

MORIMURA Yasumasa

Artist

一次審査講評

芸術は優劣じゃない。

ではなんだろうかと悩むのが芸術です。

審査、苦手です。というのも芸術って元来、バトルとは対極にある領域だからです。芸術的価値を点数で推しはかるのは無理があるんです。作品同士を戦わせ勝敗を決めるなんていうのはむしろ邪道です。でも応募者全員を採用するわけにはいかないのですから、審査員としての私は何かを選ぶことになるわけで、だから「どうも苦手だな」とつぶやくことになってしまいます。

どうしようかと考えて、結局つぎの一点だけを頼りに選ばせていただきました。それは「これ見てみたい」という、一種の賭けみたいな判断基準です。応募された未来予想図を拝見して「これホントに実現できるのかな」とか、「ひとをバカにしたような提案だ」とか、そういう予測不可能性に遭遇すると思うず「それ見てみたい」と前のめりになってしまいます。そこに賭けました。

なんども言います。芸術は優劣じゃない。ではなんだろうかと悩むのが芸術です。応募者全員のこの試行錯誤に、惜しめないエールを送りたいと思います。

二次審査講評

審査員は出品者のジャッジメントではなく、むしろ共犯者であると思いたい。

作品を作る。不思議な営みだ。我々はなぜこんなことをするのだろう。審査をしながらずっとそのことを考えていた。入選者14組の作り手たちは、みんな大変な苦勞をしている。私もひとりの作り手なのでそれがわかる。だからみんなに賞をとってほしい。でもそれはできない。芸術の評価はスポーツのように数値で明確には表せない。輪郭線がぐにゃぐにゃ変わるおかしげなジグソーパズルのようで、そのとき次第でピタッと当てはまるピースの形がちがってくるらしい。芸術はたぶんAIにも予測が不可能な未知の領域なのだ。ざまあみやがれとちょっと勝ち誇った気分審査員の私はなれたが、14組のみなさんには申し訳なく思う。ちょっとしたはずみで、誰が受賞するかがガラリと変わるからである。その予測出来ないスリリングな瞬間に審査員の私は立ち会えたが、それは神様の気まぐれで人の一生を左右するような不条理でもあっただろう。この不条理をかいくぐり、喜びにも落胆にも、まあこんなものだろうと鷹揚にかまえ、それでも自分はなぜこうして作品を作り続けているのかと問う。そういう芸術の仲間であってほしい。審査員は出品者のジャッジメントではなく、むしろ共犯者であると思いたい。



山極 壽一

総合地球環境学研究所所長

YAMAGIWA Juichi

Director-General, Research Institute for Humanity and Nature

一次審査講評

新しい技術は変革を重ねて古い技術を駆逐していくが、

アートは原初の香りを常にどこかに漂わせている。

アートとはそもそもリアルではない。それは言葉とは違うナラティブである。言葉が世界を切り分けて意味を与えるのに対し、アートは無意識の世界を揺らし、変質させる。二つの異なるナラティブがパラレルワールドを構成する。私たちはその間に浮かぶ。ただ、これまでのアートはリアルな世界とどこかでつながっていた。しかし、情報通信技術の進歩はその接続を外し、虚構の領域を拡大した。今回のテーマは現実とのつながりが曖昧になったアートをCUBEという小宇宙に解き放つ。それがどんな形となるのか。新しい技術は変革を重ねて古い技術を駆逐していくが、アートは原初の香りを常にどこかに漂わせている。その奥行きはどこかに人間がたどってきた足跡を感じ取ることができるのだ。その期待を込めて、今期の作品群を眺めてみると、リアルな世界に対する信頼が急速に薄れ始めていることがわかる。さて、そこから私たちは未来を感じ取ることができるだろうか。

二次審査講評

作品それぞれがとても個性的で評価をつけるのが難しかった。

大きく自然に題材を求めたものと人間の内面に入り込んだものとに大別できるように思う。

入選した作品それぞれがとても個性的で評価をつけるのが難しかった。大きく自然に題材を求めたものと人間の内面に入り込んだものとに大別できるように思う。大賞の作品は、地球の表層に生きる私たちにその下を流れるマグマの有様を、岐阜の川の石から歴史を遡ることで示してくれた。面白いと思ったのはJK in the street.で、リアルの行方の中心にいるのは実はJK(女子高生)ではないか。子供と大人の中間にいて「思春期スパート」のまっただ中にいる。心も身体も急速に成長する。変わっていく社会観、人間観の中で自分を見つめなければならない。本作品には、そんなリアルと反リアルのただ中で立ち止まり、もがいている姿がよく描かれている。「ふつうの」に込められた意味が二重に迫ってくる。「ふつう」を装いながら、その裏に隠れている願望が透けて見える。「違う」、「ウソばかり」と叫びたくなる自分がある。全編を流れる願いや現実を、あっさりとエピソードでひっくり返してしまうドンデン返しがすばらしい。作者の演劇的才能の高さがうかがえる。これを機会に大きく飛躍してほしいと思う。